コニカミノルタグループ
2010 年(平成 22 年)3 月期 第 3 四半期決算説明会
主な質問と回答

日　時:　2010年1月28日(木)16:30～17:30
場　所:　東京ステーションコンファレンス「サピアホール」

＜ご留意事項＞
この資料は、決算説明会にご出席になれなかった方々の便宜のため、参考として掲載しています。説明会でお話したこと全てをそのまま書き起こしたものではなく、当社の判断で簡潔にまとめたものであることをご了承ください。
また、この資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、実際の業績等は様々な要因により大きく異なる可能性があることをご了承ください。

■　業績全般について

Q:　今回の説明で、足元業績に関する不安は払拭され、来年度以降の成長に関しても、一定の自信を感じました。一方で、情報機器事業における他社の M&A の影響や、VA-TAC(液晶偏光板用位相差フィルム)における競合激化が懸念されています。このような環境下における中長期の展望および戦略について教えて下さい。

A:　来年度の計画は、現在社内で策定中です。私の個人的な見方ですが、為替前提を USドル:85 円、ユーロ:125 円とみても、5%程度の売上増、営業利益は 500 億円-600 億円レベルを目指したいと考えています。
中長期的には、情報機器事業では、成長ドライバーであるプロダクションプリント分野で、戦略的な新製品を投入し、売上拡大を図ります。
オプト事業においては、TACの販路拡大に加え、旺盛な需要が続くガラス製ハードディスク基板では、5割程度の能力増強を実施することを考えています。LED 周辺部材の事業も 2011 年度より本格的に業績貢献させたいと考えています。
またグループの地域別戦略としては、大きな成長が見込まれるアジア市場において、今後3年で事業規模を倍増させたいと考えています。

Q:　この中長期の展望および戦略において、定量的な指標はありますか。

A:　指標としては、向こう3年以内に ROE:8%、営業利益率:10%、一株あたり純利益:100 円、ROIC:10%の達成を当面の目標にしたいと考えています。

Q:　一株あたり純利益が 100 円とした場合、有機 EL や LED 周辺部材などの新規事業が、どの程度収益貢献しているのか、イメージを教えてください。

A:　新規事業の一部は来年度後半より、売上計上が開始される見込みです。しかし、本格的にグループ業績に貢献するには3年～5年は必要と考えています。よって、一株あたり純利益の 100 円というレベルは、既存事業の業容拡大によって達成したいと考えています。

■　情報機器事業関連

Q:　第3四半期の業績は米国、欧州共に好調でしたが、これは市況回復に伴うものでしょうか。

A:　北米は市況の回復に加え、販社の費用構造改革による損益改善効果(約20億円)などが貢献しました。

欧州は未だ市況回復の兆候は見られませんが、昨年9月より発売したカラーMFP新製品の販売が好調に推移し、MFP販売台数は直前期比で14％増加しました。第4四半期以降も、新製品展開による競争力強化で、着実な販売増を目指したいと考えています。

Q： 下半期の業績予想から、第3四半期業績を差し引くと、第4四半期の営業利益率が第3四半期を下回りますが、その理由について教えて下さい。

A： 業績予想から第3四半期業績を差し引いたものを、第4四半期の目標としているわけではありません。前述のとおり第4四半期は、第3四半期を上回る収益水準を目指したいと考えています。

■ オプト事業関連

Q： 第4四半期以降のオプト事業の主要製品の見通しについて教えて下さい。

A： まず、主力のTACフィルムですが、第3四半期は直前期比で物量が微減となりましたが、VA-TAC は＋9％と増加しており、強い競争力を維持しています。第4四半期に向けても、大きな調整はなく、堅調な受注状況が続く見通しです。また販路拡大については、来期以降は着実に収益貢献していくものと考えています。次に、ガラス製ハードディスク基板ですが、現在もフル稼働にて旺盛な需要に対応していますが、生産効率の改善により、販売数量は着実に増加傾向にあります。また、新規投資による大幅な能力増強も来年度後半以降の業績に貢献させたいと、考えています。光ピックアップレンズは、BD（ブルーレイ）が第3四半期は、直前期比で減少しました。第4四半期に向けて、決して楽観視は出来ませんが、顧客の販売状況には一部明るい兆しも見えており、挽回を図りたいと考えています。

Q： ガラス製ハードディスク基板の新規投資について、技術的な優位性はあるのでしょうか。

A： 直近では、記録密度の高容量化が進展しています。 既存の 250GB から 320GB、更には 500GB へと推移すると、メディア側だけではなく、サブストレート（基板）そのものに高い精度、特性が要求されます。当社はそれらの顧客要求を満たす高い技術力を有しており、今後は高い参入障壁になるものと考えています。

以上